

新開及び村祈禱について

岩田正城

(会員・佐伯市柏江)

昔行われた行事や風習で、もう廃れたものもあろうし、又、根強く今に残っているものも多いことであろう。

私の村には、「新開」という地名を持つ耕作地があり、又「村祈禱」という行事も残っている。何れも由るところがありそうであるが、知る人もなく、説明は出来ない。

而し、次ぎに述べることは、これ等に何らかの掛かり合いがあるようであるが、果たしてどうであろうか。

一、新開

いとし殿御の新開田が割れた

夕立にわかに来ぬこと

明和九年（一七七二）に刊行された民謡集に載っている

る越後の唄と言う。又、次ぎのような

新開しんげいして貯めて暮目くろめせらもん節物ひとそろえ

という佐渡の盆踊り唄もあると言う。

この新開というのは、字が示すように、新たに開墾した田畑のことであるが、それが家長の許可のもとに、自分一人で開いた場合には、その者の私有財産となり、その新開田から得た収入は、誰に気兼ねすることもなく、気俵に使うことが出来たそうである。

越後辺りから山陰にかけての地方では、この「新開」という言葉の意味が広く解釈されるようになり、私事・内緒・秘密を指す場合に用いられた。又、人知れず貯めた「へそくり」を「しんがい銭」とも言い、未婚の仲の子を「しんがい子」と言ったそうである。

私が、この「新開」という言葉に興味をそそられたの

は、前述のように、村に現存する「新開」という地名と
思ひ合わせたからである。

その新開という所は、堅田川の左岸、柏江と江頭の中
間にある。見たところ、そこは流水の堆積作用によって
出来た荒れ地に手を入れて、新開田としたであろうこと
は容易にうなずける。

その新開の川岸には、石積みので低い堤防があつて、更
に内側には竹林があつた。村の者は、その竹林を新開藪
と呼んだ。それは、私達の生活に長年溶け込んだ懐かし
い呼び名だった。

近年までは、毎年、正月が来ると、必ず村中総出の藪
役目があつた。各戸は、山から「しだ」を一把ずつ切り
出し、その「しだ」で垣を作つて、中の竹を守ると共に、
台風時における田畑や民家の被害に備えた。

而し、その藪役目も、もうなくなつてしまつた。先年
の河川工事で藪はなくなり、耕地は半減して、空しくコ
ンクリートの堤防が、長々と走っているのみである。あ
の懐しい風情は、どこを見ても偲ぶよすがもない。

二、村 祈 禱

私の村には、村祈禱という行事が伝わっている。

昔は、氏神の祭日に因んで、毎年正月の八日に行つて
来たが、時代も變つて、今は正月の三日を除いて、
元日に最も近い日曜日を定日としている。行事は座元と
なつた個人の家で行うが、座元は、全戸の順番制となつ
ている。

そのしきたりは、村内の平穩無事を祈るため、神官を
迎えて、加持祈禱することが最も重要なことであるが、
他面、村の行事を協議することもあるし、後には宴席を
設けて、出合い年始の交歓の場ともなる。全ての行事が
終わると、座元は祈禱札を村の入口に立てて、村祈禱は
終わりとなる。

今、堅田でこの行事を行っているのは、ほかに津志河
内と市谷があるだけである。いずれも柏江と隣接の地に
あるが、特に市谷は堅田川の河口に近く、柏江と同様京
阪方面と海運を営んだ家も二軒残っている。

ある日、会員の夕月三代吉氏とで近隣の探訪を行ったこ
とがあつたが、帰途、大内の善教寺跡に詣でたとき、村
の入り口に祈禱札の立てられているのを見つけたが、そ

れが、何のために立てられた札なのか気になりながら帰った。いずれ機会を得て、地元の人に尋ねてみたいと思っ
ている。

昨年の十月の末、史談会の研修旅行、奥豊後の紅葉と史跡の旅に参加し、三重・緒方方面を経て久住に至り、七里田温泉に宿泊した。七里田は、竹田から小国に抜ける四四二号線に入り、久住町役場附近から右に折れて、直入町に向かう途中にある。温泉といつても、戸数はわずか二十三、四戸ぐらいの片田舎で、普通の旅館はなく、「みやま」「大船」という二軒の民宿があるだけだった。その民宿「大船」で、一夜の旅の夢を結び、翌朝の出発時、私は一行より早くバスに乗った。車窓からあたりを眺めると、すぐ近くの七里田川（川というより三方張りのちょっと大きな谷といった感じ）に架かった橋のたもとに祈禱札の立てられてるのが目に入った。すぐバスを降りて間近に見ると、高野山の祈禱札だった。宿に取って返し、女将に聞いてみると、風祭と病除けの祈禱札で、悪者が入って来ないよう、村の入り口に立てたものと分かった。此処にもこんな風習があったのかと、一抹の感慨を残しながら七里田を去った。

静岡県の沼津地方のある所では、毎年七月に「辻切り」という行事を催すという。神社や寺院の祈禱札を竹に刺して、二本一対として村の全ての入口に立てる。

滋賀県八日市地方のある所では、毎年正月の行事として、各戸が藁を持ちより大きな縄をなって、村の入口の木に掛け渡し、その中央に祈禱札や呪術的なものを吊り下げる。これを勧請吊というそうである。

堅田や七里田に伝わる札立てても「辻切り」あるいは、「辻しめ」と呼んでも差支えないものであるが、その由来するところは、密教で行う結界や、神社で鳥居の注連縄をもって聖域と俗界を断ち切る神事が、世俗に広まったものではあるまいか。それにしても、何かを恐れ、何かに頼る人間の弱さは、遙かに時空を超えても、なお、変わることはないのだらうか。